

STAGE+を楽しむ(24)(HP 収載)

—ヨハネ受難曲—

1. 始めに

前報(23)に引き続き、STAGE+の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回は、ヨハネ受難曲の三つの演奏を選びました。今回は、これまでの対策に加えて、PCのUSBポートにCrystal E Jtuneを繋ぎ、ルーターからのLANケーブルのスイッチングハブの入力LANポートに入手したばかりのLAN iSilencerをセットしています。

作品の概要と演奏者は次のとおりです。

1) リヒターが振る《ヨハネ受難曲》

ミュンヘン・バッハ管弦楽団

収録日: 1971年9月7日

1724年ライプツィヒにて、聖金曜日に初演されたバッハのヨハネ受難曲。それ以来バッハの重要なレパートリーであり続けています。リヒターは、当時のもっとも優れたバッハ歌いを集め、ミュンヘン・バッハ管弦楽団のメンバーと共に、その神髄に迫る素晴らしい録音を残しました。歌手陣の卓越したテクニックと、それを盤石に支えるリヒターが生み出す、バッハの重厚な音楽をお楽しみください。

ソリスト:

ペーター・シュライアー (テノール)、エルンスト＝ゲロルト・シュラム (バス)、ヘレン・ドナート (ソプラノ)、ジークムント・ニムスゲルン (バス)、ユリア・ハマリ (アルト)、ホルスト・ラウベンタール (テノール)

アンサンブル:

ミュンヘン・バッハ合唱団、ミュンヘン・バッハ管弦楽団

指揮:

カール・リヒター

ヨハン・セバスティアン・バッハ

ヨハネ受難曲 BWV 245



2) アーノンクール指揮、バッハのヨハネ受難曲

ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス

収録日: 1985年6月30日

1985年、バッハ生誕300周年を記念してグラーツ大聖堂でマタイ受難曲が演奏されました。指揮を務めたのはアーノンクール。バッハ解釈における開拓者であり、最高の指揮者でもあった彼が、1953年創設のウィーン・コンツェントゥス・ムジクスと共に、この偉大な楽曲に挑みました。少年合唱団を使用し、ソプラノとアルトのソロを合唱団員に振り分けるという珍しい演奏で、大作の真価を改めて示しています。

ソリスト:

クルト・エキルツ (テノール)、アントン・シャリングァー (バス)、ロベルト・ホル (バス)、トーマス・モーザー (テノール)

アンサンブル:

テルツ少年合唱団、コンツェントゥス・ムジクス・ウィーン

指揮:

ニコラウス・アーノンクール

ヨハン・セバスティアン・バッハ

ヨハネ受難曲 BWV 245



3) バロック音楽のスペシャリスト、ガーディナーが《ヨハネ受難曲》を指揮

シェルドニアン劇場にて

収録日: 2021年3月30日

バロック音楽の第一人者であるサー・ジョン・エリオット・ガーディナーが、自身の創立したモンテヴェルディ合唱団とイングリッシュ・バロック・ソロイストと共に演奏したバッハの《ヨハネ受難曲》です。会場はオックスフォードの歴史あるシェルドニアン劇場で、楽曲の雰囲気さをさらに引き立たせます。イエス・キリストの受難がドラマティックな音楽で語られる作品であり、ガーディナーの緊張感に満ちた音楽運びはその内容を強い説得力をもって伝えています。

ソリスト:

アレックス・アッシュウォルス (バス)、ピーター・ダヴォレン (テノール)、アレクサンダー・チャンス (カウンターテノール)、ジュリア・ドイル (ソプラノ)、ウィリアム・トーマス (バス)、ニック・プリチャード (テノール)

アンサンブル:

イングリッシュ・バロック・ソロイスト、モンテヴェルディ合唱団

指揮:

ジョン・エリオット・ガーディナー

ヨハン・セバスティアン・バッハ

ヨハネ受難曲 BWV 245



3. 試聴の経過

リヒター指揮ミュンヘン・バッハ管弦楽団の演奏は、1971年の収録です。おそらくはアナログ画像収録のものからデジタル化されたものと思われます。アナログ盤かCDでしか享受できないものが、こうやって画像付き音源で容易に楽しめることは驚きです。音質は、最新のガーディナー指揮イングリッシュ・バロック・ソロイストの演奏には及びませんが、当時の最高峰の端正な指揮のリヒターの正統派のバッハ音楽であることが分ります。

アーノクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスの演奏は、1985年の収録です。1985年はDVD以前であり、画面の横幅がせまいですので、おそらくはTV用などのアナログ画像収録と思われます。手兵ウィーン・コンツェントゥス・

ムジクスを率いて古楽界に打ってでたアーノンクールらしく、切れの良い演奏です。ソプラノやアルトのパートを少年のソロや合唱が受け持っています。収録が新しいだけあって、リヒターのものより、画質、音質とも向上しています。

ガーディナー指揮イングリッシュ・バロック・ソロイスツの演奏は、2021年の収録で、もっとも新しい収録です。ちょうどコロナのパンデミックのさなかですので、聴衆はなしで、オーケストラも合唱陣も互いに距離をとるなどの工夫をしての演奏です。音質的にはもっとも良く、合唱の分離と協和、ソリストの歌唱の質感、古楽器群の質感なども満足できるレベルです。演奏はガーディナーの穏やかな指揮で現代のバッハ演奏の典型という印象です。

なお、演奏時間はリヒターが130分、アーノンクールが114分、ガーディナーが120分となっており、それぞれのバッハのこの曲に関する考え方が出ています。

4. まとめ

STAGE+配信の年代を違えた3曲のヨハネ受難曲は、それぞれの特徴を聴きとることができる演奏でした。これまでの仮想アース、MRF-005Tに加えてスピーカーアキュライザーの効果、さらにはCrystal E JtuneやLAN iSilencerの効果も確認できました。

以上